

## 多様体論 第1回 発表ノート

① 該当セクション: §2.  $m = \mathbb{R}^n$  空間 (+ §3. ハートル空間の角丸)

② やる事: 先ずは、 $\mathbb{R}^n$  に Euclid メトリックを導入する。その後 Euclid メトリックから定まる  $\mathbb{R}^n$  における近傍を定義し、 $\mathbb{R}^n$  における開集合と近傍から定め、開集合とは点をもつて開集合を定義する。そしてこの2つの概念の関係を見て終る。

Def 2.1  $x, y \in \mathbb{R}^n$  の Euclid メトリックを次の様に定める。

$$d(x, y) := \sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i - y_i)^2}$$

$\mathbb{R}^n$  と  $d$  の組  $(\mathbb{R}^n, d)$  を Euclid 空間と呼ぶ。

Prop 2.2  $x, y, z \in \mathbb{R}^n$  に満たす、次が成立。

$$(1) \quad d(x, y) \geq 0, \quad d(x, y) = 0 \iff x = y$$

$$(2) \quad d(x, y) = d(y, x).$$

$$(3) \quad d(x, z) \leq d(x, y) + d(y, z).$$

証明: (1), (2) は明らか。 (3) の式を  $a_i = x_i - y_i, b_i = y_i - z_i$  として書き下すと、

$$\sqrt{\sum (a_i + b_i)^2} \leq \sqrt{\sum a_i^2} + \sqrt{\sum b_i^2}$$

であり、これを同値変形すれば

$$\sum a_i b_i \leq \sqrt{\sum a_i^2} \sqrt{\sum b_i^2}$$

とするので、この式が示される。しかし、Schwarz の不等式がこれで保証あるのが主張は示される。

註) 一般に  $X \neq \emptyset$

があった時、

$$d: X \times X \rightarrow \mathbb{R}$$

が Prop 2 の3条件

を満たすとき、 $d$  を

ヨリ開数といい、 $(X, d)$  をヨリ空間と呼ぶ。

e.g.) Manhattan, Chebyshev, Euclid

→ これらは同一の位相を定める。

註)  $a_i \neq 0 \wedge b_i \neq 0$  を仮定して、2乗法則

$$(a_i + b_i)^2$$

の(割り算式)  $\leq 0$  を考えると示される。

Def 2.3  $x \in \mathbb{R}^n, \varepsilon > 0$  に満たし、

$$N_\varepsilon(x) = \{y \in \mathbb{R}^n \mid d(x, y) < \varepsilon\}$$

$\mathbb{R}^n$  における  $x$  の近傍と言ふ。

Def 2.4  $O \subseteq \mathbb{R}^n$  に満たし、

$$\forall x \in O \exists \varepsilon > 0 [N_\varepsilon(x) \subseteq O]$$

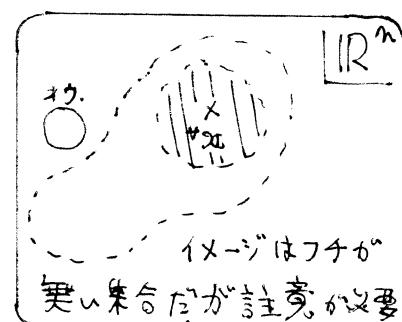
が成立する時、 $O$  を  $\mathbb{R}^n$  の開集合と言ふ。

Prop 2.5  $\mathbb{R}^n$  の開集合に(i) い=えが成立。

(1)  $\mathbb{R}^n, \emptyset$  は  $\mathbb{R}^n$  の開集合。

(2)  $O_1, \dots, O_k: \mathbb{R}^n$  の開集合  $\Rightarrow \bigcap_{i=1}^k O_i: \mathbb{R}^n$  の開集合。

(3)  $\{O_\lambda \mid \lambda \in \Lambda\}: \mathbb{R}^n$  の開集合からなる集合系  $\Rightarrow \bigcup O_\lambda: \mathbb{R}^n$  の開集合。



1-2.

証(1)  $\forall x \in \mathbb{R}$  に於けり、 $\varepsilon = 1$  とすれば  $N_1(x)$  の定義から  
 $N_1(x) \subseteq \mathbb{R}$ 。  
 $\forall x \in \mathbb{R} [\forall \varepsilon > 0 [N_\varepsilon(x) \subseteq \mathbb{R}]$  は  
 $x \in \mathbb{R}$  の否定偽性から真となる。従って  $\mathbb{R}$  は  $\mathbb{R}^n$  の用集合。

証(2) かぎり要素の個数  
 が成り立つ假と  
 $(x, (-\frac{1}{m}, \frac{1}{m})) (m \in \mathbb{N})$   
 がある。

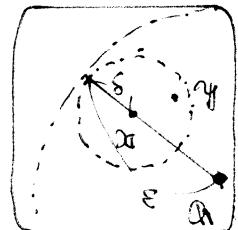
(2)  $x \in \bigcap_{i=1}^k O_i \iff \forall i \in \{1, \dots, k\} [x \in O_i]$   
 $\iff \forall i \in \{1, \dots, k\} \exists \varepsilon_i > 0 [N_{\varepsilon_i}(x) \subseteq O_i]$   
 $\varepsilon := \min \{ \varepsilon_i \mid i \in \{1, \dots, k\} \}$  と定めれば、  
 $\forall i \in \{1, \dots, k\} [N_\varepsilon(x) \subseteq O_i] \iff N_\varepsilon(x) \subseteq \bigcap_{i=1}^k O_i$   
 が成立する。

(3).  $x \in \bigcup_{\lambda \in \Lambda} O_\lambda \iff \exists \lambda_0 \in \Lambda [x \in O_{\lambda_0}]$   
 $\iff \exists \lambda_0 \in \Lambda \exists \varepsilon_{\lambda_0} > 0 [N_{\varepsilon_{\lambda_0}}(x) \subseteq O_{\lambda_0}]$ .  
 $O_{\lambda_0} \subseteq \bigcup_{\lambda \in \Lambda} O_\lambda$  なり  $N_{\varepsilon_{\lambda_0}}(x) \subseteq \bigcup_{\lambda \in \Lambda} O_\lambda$

E.g. 2.6  $\mathbb{R}^n$  に於けり  $N_\varepsilon(x)$  は用集合。

証  $\forall x \in N_\varepsilon(x)$  に於けり、 $d(x, y) < \varepsilon$  す。  $\delta = \varepsilon - d(x, y)$   
 を定め  $N_\delta(y)$  を作る。  $\forall y \in N_\delta(y)$  に於けり、

$$\begin{aligned} d(x, y) &\leq d(x, y) + d(y, x) \\ &< d(x, y) + \delta \\ &= \varepsilon \end{aligned}$$



よし、 $N_\delta(y) \subseteq N_\varepsilon(x)$ 。従つて、 $N_\varepsilon(x)$  は  $\mathbb{R}^n$  の用集合。

Def 2.7  $C \subseteq \mathbb{R}^n$  に於けり、

$\{x_n\} \subseteq C \wedge x_n \rightarrow x \implies x \in C$   
 を満たす時  $C$  は  $\mathbb{R}^n$  に於けり用集合と言ふ。

Def 2.8 用集合の補集合は用集合で用集合の補集合は用集合。

証  $O: open \Rightarrow O^c: closed$   $O^c$  の実からなる可算離散集合に於けり

その外延  $x$  が  $O$  に含まれるとする。 $O$  は用集合なので、

$\exists \varepsilon > 0 [N_\varepsilon(x) \subseteq O]$  が成立。一方、 $x_n \rightarrow x$  す。  $N_\varepsilon$  が  $O$  に

$n \geq N_\varepsilon \Rightarrow d(x_n, x) < \varepsilon$  が成立し、 $x_n \in O$  となる。

これは  $O \cap O^c = \emptyset$  に矛盾。

C: closed  $\Rightarrow C^c: open$   $C^c$  が用集合でないとする。すな

$\exists x_0 \in C^c \exists \varepsilon > 0 [N_\varepsilon(x_0) \cap C^c \neq \emptyset]$

が成立するとする。 $\varepsilon = \frac{1}{m}$  ( $m \in \mathbb{N}$ ) とすると、 $N_\varepsilon(x_0) \cap C^c$  を

満たす  $C^c$  の元が存在し、それを  $x_n$  とすと、 $x_n \in C^c$  へ収束

する  $C$  の元がいたる  $\{x_m\}$  を得る。これは  $C$  が用集合である事に矛盾。

Cor 2.9  $\mathbb{R}^n$  の開集合に関する次が成立。

(1)  $\mathbb{R}^n, \emptyset$  は  $\mathbb{R}^n$  の開集合。

(2) 任意個の  $\mathbb{R}^n$  の開集合の共通部分は  $\mathbb{R}^n$  の開集合。

(3) 有限個の開集合の和集合。

（証） Prop 5, Thm 8, ド・モルガンの定理から成立。□

Rmk 2.10 フチの有無で開集合と閉集合を判断してはダメ。

直感的なイメージとしては正しいが、 $[0, 1)$  は  $\mathbb{R}$  で開でも閉でもないが、 $[0, 1]$  では閉である。

註 相対位相  
を入れるの?  
本当はもう少し  
後の話。

《オマケ：線型代数》。

Def 3.1.  $V$  に和・スカラ倍といふ2つの演算が入る時、

$\mathbb{R}$  の8つの性質を満たすとき、 $(V, \mathbb{R})$  を実ベクトル空間と言う。

(I) (1)  $\forall x, y \in V [x + y = y + x]$

(2)  $\forall x, y, z \in V [(x + y) + z = x + (y + z)]$

(3)  $\exists 0 \in V, \forall x \in V [x + 0 = x]$

(4)  $\forall x \in V \exists -x \in V [x + (-x) = 0]$

(II) (5)  $\forall x \in V \forall \lambda, \mu \in \mathbb{R} [\lambda(\mu)x = \lambda(\mu x)]$

(6)  $\forall x \in V \forall \lambda, \mu \in \mathbb{R} [(\lambda + \mu)x = \lambda x + \mu x]$

(7)  $\forall x, y \in V \forall \lambda \in \mathbb{R} [\lambda(x + y) = \lambda x + \mu y]$

(8)  $\exists 1 \in \mathbb{R} \forall x \in V [1x = x]$ .

註 (3), (4) は本により。  
2. 一意性を定義  
に入れない事も多い。  
カントンなるのが示すと、  
 $0 = 0 + 0' = 0'$ ,  
 $0' = 0 + 0 + 0'' = 0''$   
が示される。

Prop 3.2.  $\forall x \in V$  に必ずしも  $0x = 0$ ,  $-x = (-1)x$ 。

証. •  $0x = (0+0)x = 0x + 0x$ . ①の一意性から

$$0x = 0.$$

•  $0 = 0x = (1-1)x = x + (-1)x$ .  $-x$  の一意性から  
 $-x = (-1)x$ .

E.g. 3.3.  $\mathbb{R}^n$  は和とスカラ倍を。

$$x + y := (x_1 + y_1, \dots, x_n + y_n)$$

$$\lambda x := (\lambda x_1, \dots, \lambda x_n)$$

と定めると実ベクトル空間となる。

註  $\mathbb{R}^n, \mathbb{C}^n, M_{nm}(\mathbb{R})$ ,  
 $n=1$  以下の実係数多項式  
全体, 矩陣全体,  $\mathbb{R}$  から  
 $\mathbb{R}$  への連続写像全体,  
部分空間, 共通空間, 和空間,  
生成空間, 開空間, 双対空間

Def 3.4. 実ベクトル空間  $V$  の元  $v_1, \dots, v_m$  が 1 次独立であるとは

$$\forall c_1, \dots, c_n \in \mathbb{R} [c_1 v_1 + \dots + c_n v_n = 0 \Rightarrow c_1 = \dots = c_n = 0]$$

を満たす事をいふ。1 次独立でない時は 1 次従属といふ。